

10ヶ月児における弱者への向社会的行動の発達

中川 有純

【序論】ヒトは、コストをかけてでも他者のために行動することがある。他の個人や集団を助けようとしたり、他者のためになることを意図した自発的な行為は、向社会的行動(prosocial behavior)と呼ばれる。発達研究においては、生後2年目以降の幼児における向社会的行動について、多くの研究が行われてきた。幼児は、困っている他者に対して、物を拾う、慰めるなどの単純な援助行動を行うだけでなく、自分には直接的な利害のない第三者の文脈における他者の道徳的違反への介入行動としても、向社会的行動を行うことが明らかとなっている(Vaish, Missana & Tomasello, 2011)。

前言語期の乳児に関して、乳児は他者の相互作用や行為に基づいて道徳的な評価を行うことが可能であると示されている。例えば、攻撃的な相互作用における被害者に同情的な反応を示すこと(Kanakogi, Okumura, Inoue, Kitazaki & Itakura, 2013)、他者の行為を援助するキャラクターを選好すること(Hamlin, Wynn & Bloom, 2007)、また困っている他者に対して第三者の援助行動を期待することが明らかとなっている(Köster, Ohmer, Nguyen & Kärtner, 2016)。さらに、道徳的な評価に基づいた乳児自身の道徳的行動として、攻撃作用における加害者に対して第三者罰を行うことが明らかになっている(Kanakogi, Miyazaki, Takahashi, Yamamoto, Kobayashi & Hiraki, 2022)。一方で、向社会的行動の発達の起源については未解明である。そこで、本研究では、前言語期の乳児において、弱者に対して向社会的行動が生起するのか検討することを目的とした。10ヶ月児は攻撃的な相互作用における被害者に対して、積極的に向社会的行動を行うという仮説を立てた。

【方法】本研究は、10ヶ月児22名を対象に、以下の課題を実施した。2つのエージェントが石につぶされて困っている状況にあるときに、乳児が視線を向けた方のエージェントの石がなくなり、エージェントを助けることができるという、視線随伴課題を10回行った。その後、エージェント同士の攻撃的な相互作用を3回提示し、最後に再度視線随伴課題を10回実施した。攻撃的な相互作用の前後で、2つのエージェントのうち被害者のエージェントを援助する割合に変化がみられるかどうかを検討した。

【結果・考察】本研究の結果、攻撃的な相互作用の前後で乳児の被害者に対する選択的視線の変化はみられなかった(テストタイプ: $z = -0.062$, $p = .951$; 試行数: $z = 0.025$, $p = .980$; テストタイプ*試行数: $z = 0.387$, $p = .699$)。したがって、10ヶ月児が攻撃的な相互作用の被害者に対して向社会的行動を行うという仮説は支持されなかった。その要因として、乳児のネガティビティバイアスの影響が考えられる。乳児において、肯定的な情報より否定的な情報の方が学習が早く、強化されやすいというネガティビティバイアスが報告されている(Mumme & Fernald, 2003)。このことから、本研究で用いたエージェントに対して肯定的な行為を行う向社会的行動の課題の学習が、10ヶ月児では成立しなかったのではないかと考えられる。また、先行研究から乳児は他者に対して向社会的な動機を保持していることが明らかとなっているが、本研究で児自身の行動としてはみられなかったことから、他者の行為に対する道徳的な評価と児自身の実際の行動の発達にギャップがあることも考えられる。さらに、実験で使用した課題が、児の自発的な向社会的行動を生起させるには不十分であった可能性が考えられる。今後の研究では対象月齢の変更や、実験の課題やシナリオの修正・変更により、更に検討を重ねていきたい。今後も研究を継続して行うことにより、発達初期における向社会的行動についてより深く理解していきたい。(比較発達心理学)